

石田頼房先生の思い出と『二人で歩いた まち・むら・人生』のこと

私が石田先生と初めてお話したのは、1996年ごろ、建築家で近代建築研究者である佐々木宏先生の出版記念パーティーの時だった。じつは、その何年か前、石田先生のご本から図版を転載させていただく際、許可のお願いがぎりぎりになってしまい、お返事をいただかないまま掲載してしまったことがあった。そのことがずっとひっかかっていたので、先生の姿をお見かけした時、これは非礼を詫げるチャンスだと思って勇気を出して話しかけた。大学時代は、3年生のときに前期、後期1コマずつの講義を受けただけで、個人的にお話する機会もなかったし、お話しできると思っていなかった。先生に卒業生であることを名乗ってお詫びをすると、「まあ、あのタイミングで送ってこられてもねえ」と表情も変えずにおっしゃった。「ああ、まずかった」と思いながらも、勝手に少しすっきりしたような気がした。そして、それ以上会話も続かず、石田先生は佐々木先生とまたお話し始めた。石田先生と佐々木先生、専攻も違うしどこに接点があるのかしらと不思議に思ったが、大学院時代の同級生だと教えてくれた。お二人とも学生時代に戻ったような表情をして、なんだか楽しそうで話が尽きない。なんとなく微笑ましくなって何枚か写真を撮らせていただいた。

それから8年ほど経ったある日(2004年3月ごろ)、突然会社に石田先生からお電話があった。先生が日本建築学会大賞を受賞されるとのこと、そしてその記念の小冊子(『展望と計画のための都市農村計画史研究』)をつくってほしいとのことだった。「あのときもらった名刺をなくさないように取っておいたんだよ」と先生は電話の向こうでおっしゃり、私は緊張のあまり思わず直立不動になった。

最初の打ち合わせの際に、じつは3冊お願いしたいものがあるとおっしゃった。1冊がその小冊子、もう1冊が先生のお父様の後妻である石田和子さんの句集、そしてもう1冊は、亡くなった奥様と書き溜めたエッセイ集だということだった。

小冊子『展望と計画のための都市農村計画史研究』はスムーズにでき上がった。論文に近いものだったが、先生の文章はあまり難しい言葉が使われておらず、どこことなく

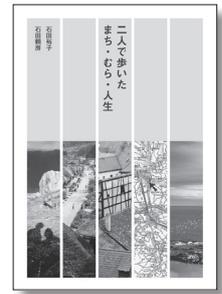
ユーモラスだった。装丁は会社の先輩が受け持ってくれて、先生の雰囲気にとりあわせたあたたかい風合いの本ができ上がり、先生も気に入ってくださった。

先生はとてもフットワークがよく、本の打ち合わせの際は、神保町の私の会社まで気軽に来てくださった。打ち合わせそのものにはあまり時間がかからなかったが、先生はその威厳のある風貌から気むずかしい方かと思いきや、意外にもお話好きで、奥様のこと、ご家族のこと、小さいころのこと、研究のこと、お住まいのあるもえぎ野のこと、大好きな鳥のこと、何でもよくお話しになった。喜怒哀楽はあまり表わさなかったけれど、ご自分でお話ししながら、フフフと笑うことはよくあった。

あるとき私が「都立大が首都大学になって、母校が無くなってしまったようで、本当に悲しい」と言うと、先生は「まあでもさあ、大江戸大学にならないだけよかったよ」と独特のユーモアで返されて、思わず大笑いしたことがあった。また一度、打ち合わせのあとに会社の近所のうどん屋でお昼をご一緒したのだが、そのときいきなり、「そうそう、カブトムシの幼虫がね」と話し始めた。先生の声は決して大きいわけではないけれど、結構通る。ランチに来ていた人たちの刺すような視線を感じ気が気でなかったのだが、先生は我関せずで、注文したうどんが来るまでずっと幼虫の話をし続けた。

先生は、「エッセイがなかなか進まなくてね」とおっしゃっていたが、句集が完成してほどなく原稿をもって会社を訪れた。そして2006年3月から本格的にエッセイ集の作業が始まった。最初に全て原稿が揃っていたのではなく、1ヵ月に1〜2度打ち合わせをしながら少しずつつくっていくことになった。

内容は、お二人が住んだり、訪れたり、研究したりしたゆかりのある世界中の場所での思い出や、その場所そのものについて書かれたもので、70歳までに70の文章を仕上げようと、半分ずつ分担されていた。奥様と先生はお互いにエッセイの原稿がどこまで進んでいるのか、敢えて話さないようにしていたようだ。きっと、でき上がった原稿を見せ合うときを楽しみにしていたのだろう。ところが奥様



が2001年に突然亡くなったことで、その楽しみが失われてしまった。おそらく、先生は原稿をつくるのにとても苦労されていたと思う。奥様の原稿は未完のものも多く、それがワープロのどこに入っているのか、手書きのメモの状態のものもあったらしく、先生は丹念にそれを探されたようだ。そして、原稿の断片が見つかるたびに、一人で、ときに笑ったり考え込んだり涙したりしたにちがいない。「ハンドバッグからメモが見つかったね」という話も聞いたことがある。少しでも原稿が残っていたら必ずそれを使い、手を付けていない箇所は先生が書かれた。打ち合わせでは多めに持ってきてくださった写真のなかから、どれを掲載するのか選択した。どうやら打ち合わせの時も先生の頭上30cmくらいのところに奥様がいらっしゃり、いつも相談しているようだった。「こんな写真を使ったら怒るかな」「これは喜ぶかな」「どう思うかな」作業しながら独り言のように、よくそうおっしゃっていた。

タイトルは『二人で歩いた まち・むら・人生』に決まり、写真がたくさん入った楽しいエピソードの詰まった本ができ上がった。最終的に41編が収録されている。装丁は『展望と計画の都市農村計画史研究』と同じく会社の先輩がつくってくれた。私が手掛けてきた本の中でも、とても思い入れのある1冊だ。建築の本をつくるのが主なので、いままでも後にも先にも原稿を読んで涙することなどなかったのだが、「あとがき」の文章を読んで、涙が止まらなくなってしまった。楽しい時間も、ずっと続くと思っている平穏な日常も、必ず終わるときがくる。ときに残酷なまでも突然に。それを痛感して思わず涙が出たのだ。

本ができてからも、先生はとくに用事がなくても思い出したころに会社を訪ねてくださり、近況やいま取り組まれている研究のことなどを話された。また一緒に本をつくることができればいいなあとと思っていた矢先に、先生が病に倒れたという知らせが届いた。でも、奥様は先生を連れて行かなかった。それはお子さんたちのためだったのか、まだ先生にはこの世でやるべきことがあるという判断だったのか。

2009年、神奈川の鶴巻温泉病院に入院されていた先生を、

何度か見舞った。目を覚まされているときもあったし、デイルームで食事をしているときもあったが、いくら呼びかけても、お話しすることはできなかった。おそらく私だということもお分かりにならなかったと思う。野鳥の鳴き声ばかりの入った、先生が絶対に喜びそうな輸入盤CDを見つけて病室でかけてみたが、残念ながら効果はなく反応がみられなかった。退院され移られた青葉台のホームにも1度うかがった。ご子息の周一さんと克二さんと一緒に、まだ寒さの残る3月に車椅子で散歩した。

それから私も両親の介護に追われ、先生のところにかがうことができなくなっていた。来月こそと思いながら時間ばかりが過ぎていき、昨年11月に先生が亡くなったとうかがった。先生はまだ待っていてくれると思っていたのに……ただただ呆然とした。

高見澤邦郎先生が声を掛けてくださり、この追悼集の編集・制作をお手伝いできることになった。いつかもう1冊、石田先生の本をつくるお手伝いがしたいと思っていたが、それが追悼集になるとは、光栄だと思ふ半面、とても寂しくもある。いろいろなことを思い出しながら先生への感謝の気持ちを込めて作業した。

作業中にふと思ったのだが、もしかすると先生が倒れてから亡くなるまでの間、奥様は天国で、エッセイのまだ手を付けていなかった箇所の原稿を書かれていたのかもしれない。そしてそれが完成して先生をお呼びしたのだろうか。そう思えてしょうがないのだ。いまごろきつとお二人で、70編揃った完成版の『二人で歩いた まち・むら・人生』をつくっていらっしゃるにちがいない。

みなみぐさ 千穂
南口千穂 / 1987年東京都立大学建築工学科卒。コクヨ意匠設計部、設計事務所勤務を経て、1992年プロセス・アーキテクチャ、1996年より南風舎にておもに建築書の編集に携わる。